

タイ・シンガポール旅行記

中村嘉孝

1月12日～18日の日程で、タイとシンガポールを訪問した。
タイは2010年9月以来15カ月ぶり、シンガポールは約30年ぶり。

「タイ大好き会」

旅行の目的はタイで開催された「タイ大好き会」(タイ語で Rak Muang Thai) に出席するため。「会」と名付けているが、ごく個人的な集まりで、私とタイ人の弁護士シッタア氏を中心に、タイ好きの日本人と(タイ好き当たり前の)タイ人たちの、極めて気楽な会なのである。なんとなくできた集まりだが、それでもすでに10数年続いている会である。

会の特徴は、タイを愛する人は、国籍を問わず大歓迎。「会則なし」「名簿なし」「年会費なし」。主活動は、首都圏で年に数回開催される食事会と、バンコクで年に1回開催される食事会に、任意に出席することだけ。

私が年齢の関係で会長を務めており、とても熱心な幹事役として、田場さん、清原さんに補佐していただいている。

田場さんはITセキュリティの専門家で、タイ語、ミャンマー語を得意とし、時折、タイ・ラオス・カンボジア・ミャンマーを旅している御仁。

清原さんは、タイの大学で法律を学んできた特別タイを愛する日本人である。今回のバンコクでの会は、本来同氏の卒業式のリハーサルを見学するためだった。タイでは大学の卒業式に必ず国王か皇太子クラスの王族が出席し、1人1人の卒業生に卒業証書を手渡すという儀式があり、式典へは本番・リハーサルとも、一般(外国人を含め)の出席は、許されていないが、式典後の家族や友人との記念撮影が、タイ人にとって一生の大切な思い出となるとのこと。

このリハーサルが、1月13日の昼にある予定だったので、13日の晩に食事会を決めたのだが、その後、大学の都合でリハーサル・卒業式が3月に延期になったとのことで、でも、私とか日本から参加する5名の会員はすでに飛行機の予約も終わっており、「タイ大好き会」だけを開催することとした。

今回のバンコクでの「タイ大好き会」には、邦人約20名、タイ人約10名、計約30名が集った。場所はバンコクの海鮮料理店「フアプラ」(魚の頭)。30人前後入れる大きな個室が4～5室もある大型のレストラン。美味しいエビ・カニやタイ料理を食べ、飲み物込みで、1人約650バーツ(邦貨約2000円)。初めて出席した邦人諸氏諸女史からは「とても楽しい会でした。来年もぜひ参加したい」との嬉しいコメントも頂き、やはり「タイ大好き会」だけでも開催してよかったと思った。



ヴィマンメークとスパンブリ

久しぶりの訪タイだったので、ラーマ5世の後宮「ヴィマンメーク」(右の写真)と古都「スパンブリ」を観光した。

ヴィマンメークは、ラーマ5世の正妻および側室の居宅として建てられた建物の1部で、ラーマ5世には、100人以上の側室がいたと言われており、ヴィマンメークはそのうちの建物の一部とのこと。長年閉鎖されていたが、2年前に公開されたもの。現王室(ラーマ9世)に側室制度はすでになく、タイ政府はラーマ5世の後宮の公開をためらっていたようだが、現王妃が公開を勧めたと聞いた。ラーマ5世の父君ラーマ4世が70~80人の側室を持ち、英国人女性アンナを驚かせたのは「王様と私」で世界的に有名になった。



ヴィマンメークとは「雲の上の宮殿」という意味。1人ひとりの側室の部屋は、ヨーロッパから取り寄せた家具調度で飾られている。

スパンブリは、バンコクの西北約100kmの小さな都。でも3000年の歴史があると言われている。有名な寺院や鳥類保護区がある。写真(右)は、建設中の博物館(?)の庭にある巨大な竜。スパンブリはタイの田中角栄と言われるバンハーン元首相の選挙区で、バンコク・スパンブリ間の道路は見事に舗装され、車は150km/hで飛ばしている。



タイ人の対日感情について

バンコクに着いた日、私はスワンナプーム空港から電車で市内まで行き、シッター氏が指定した駅で降り、彼が車で待っていてくれたのだが、道路は相変わらず相当の渋滞。お蔭さまでいろいろ話ができただが、その中で、面白い話があった。それは東日本大震災のときに、日本から報道されたテレビのある情景のこと。テレビで津波の痕の瓦礫の山が映し出され、そこに老夫婦がなにやら掘り出そうとしている。どうやら小型の金庫のようで、老夫婦は苦労しながら掘り出すことができ、それを二人で担いで歩きだした。ついて行ってみると、行き先は交番だった。訊いてみると、その金庫は自分たちのものではないので、交番へ届けたとの答え。

「中村さん、この映像はビッグニュースになりました。」「なぜ?」と私。

「タイではあり得ませんよ。タイ人だったら自分の家に持っていきます。もし警察に届けたら、受け取った警察官が自分の家に持っていきます」

「日本人がいかに正直か、いかに信頼できる人々であるか、との印象を強くタイ人たちに与えました」

私はこのことだけで、日本人の性情を決めることはできないとは思ったが、「日本人に対するタイ人の評価が上がってよかった」とだけコメントした。

独特な国家の形ーシンガポール

今のシンガポールを一度見てみたいと思っていたので2泊3日で見回った。

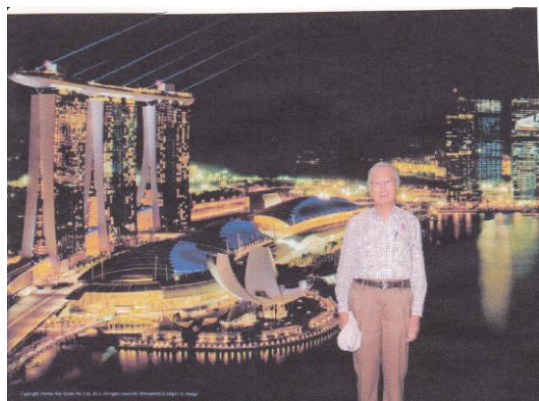
1819年、英国政府の一員であったトーマス・スタンフォード・ラッフルズが当時のジョホール王国の王族からこの島を借り受け、その後英国の植民地として開発、東西の要衝として栄えた。1975年にシンガポール共和国として独立。以来、リー・クアン・ユー率いる人民行動党政府によって、順調な発展を遂げてきた。「無借金国家」「汚職がない」「クリーンな街」「高い教育水準」「中国系・マレー系・インド系3民族の融和」はよく知られている。最近では緻密に計算された経済政策・社会政策・国土開発政策が注目されている。

中国の改革開放を指導した鄧小平が、同じ客家系のリー・クアン・ユーにアドバイスを受け、長い間、シンガポール政府高官OBを中国政府の顧問として迎え入れてきたと聞く。

ケンブリッジ大卒のリー・クアン・ユーは、独立当初から、「政府は絶対に借金をしない」「外国企業を誘致することにより、国を開発する。そのための工業団地と優秀な労働力をアレンジする」「港湾・空港・道路などのインフラを整備する」「金融センターとして機能する」「教育制度の拡充」などの方針を掲げ、日本・欧米に「アジアにシンガポールあり」との評価を受けてきた。

狭い国土は埋め立てることにより拡張し、毎年国土面積が変わる珍しい国である。2～3年見ないと、新しい施設が風景を変える。

私はほぼ30年近いブランクの後の訪問なので、著しい発展ぶりを実感するのは当然のことだが、過去2年をとっても、Marina Bay Sands（ホテル）とその周辺の開発、セントーサ島の娯楽施設の充実があり、Marina Bay Sands とセントーサ島の二カ所にはカジノがオープンしている。



左の写真は、Marina Bay Sands の屋上見学のため、特設のエレベーターの前で、後ろが無地のカーテンだけのところに立って写真を撮られたのが、屋上を見学した後戻ってみると、このような合成写真になって待っていたので、つい買ってしまった。左方に立つ三棟の高層ビルが、屋上で舟形の構造物で支えられている。屋上にはプールがあり（宿泊客専用）、世界で注目された。

セントーサ島は、シンガポール島から600m離れた島で、建国以来開発が進められてきたが、2002年からさらに大規模開発が進められ、2010年に「リゾート・ワールド・セントーサ」として、アジア有数のパワー・スポットになった。ビーチ、ユニバーサル・スタジオ、カジノなど、子供から大人まで楽しめる島だ。

シンガポール島には、MRT（都市鉄道）、自動車道路が整備され、島の主要部分が交通網で繋がっている。北西部にある「ナイトサファリ」へは片側2～3車線の道路で楽に行ける。

シンガポールの評価

わずか2泊3日の滞在で、どうこういう資格はないが、「偉大なる近代的な都市国家」という賛辞を捧げたい。高層ビルの立ち並ぶ繁華街、樹木生い茂るクリーンな街、閑静な住宅街。よく整備されたインフラ、交通網。どれをとっても非の打ちどころがない。

リー・クアン・ユーは、自叙伝に「シンガポール物語」と命名した。まさに彼が、今のシンガポールを作り上げた、と言えよう。

確固たる政治哲学と国家の基本方針を持ち、それらを一つひとつ地道に遂行して行った。

シンガポールは民主主義を標榜する共和国であり、長年、人民行動党々首だったリー・クアン・ユーは、5年に一度総選挙を戦い、国民に信を問ってきた。しかも、建国以来、人民行動党は圧倒的な勝利をおさめ、政権を維持してきた。それゆえ、人民行動党の推進する政策は全て実現してきた。それが今のシンガポール。

シンガポールはタクシーが安い。丘の上のホテルから都心までS\$10（約750円）、かなり遠くまで行っても1000円程度。だからよくタクシーを利用した。ドライバーはほとんど中国系、訊いてみると、20年以上タクシーの仕事をしている高齢者が多い。「シンガポールをどう思うか？」と訊くと、だいたい「狭すぎる（too small）」という返事が返ってくる。中には「政府のお蔭でマイホームを持てた」と言う者もいた。

こんな立派な政府を持っているシンガポール国民は世界一幸せな人々かと思うと、そうでもないようだ。たとえば、あるサイトにこんな記述がある：－

「米世論調査企業ギャラップ社は（2012年12月）22日までに、笑いの頻度や休息時間の大小など日常生活の「充実度」に関する世界148カ国を対象にした調査結果を発表し、最も「不満」を抱いていたのはシンガポール国民だったと報告した。逆に満足感が最も多かったのは中米パナマと南米パラグアイだった。「幸福度」が高い上位10カ国のうち中南米諸国が8カ国を占めた。」
そうだ。

これを見て、シンガポール政府はどう思ったのだろうか？

リー・クアン・ユーの独り言は、おそらく

「これだけ努力して、シンガポール国民のために努力してきたのになァ。

これからは、国民の満足度向上のための政策を立案するよう、後継者たちに指示しようか」

と言ったところだろうか。

(2013・1・31)